特集　企業内診断士のパラレルキャリア

第３章
SDGs 支援で高める自身のサステナビリティ
太田　宜志さん

福田　浩之
大阪府中小企業診断協会

「企業の経営者や従業員から，行政や非営利団体の職員，市民まで，多様な立場や考えを持つ人々が，世の中を良くするためにSDGsという旗印に集まってくる。それは素晴らしいことだと感じています」

「SDGsは魔法の言葉」と語る太田宜志さんは現在，パラレルキャリアとしての活動のほとんどをSDGsに注いでいるが，興味を持ち始めたのは診断士登録後の2018年だという。そこから数年で，講演や執筆，勉強会開催など，サステナブル経営／SDGs研究会代表としても精力的に活動するに至ったきっかけや思い，パラレルキャリアに対しての考え方などについて話を伺った。

サステナブル経営／SDGs研究会代表の太田宜志さん

１．失意の時代に出会った診断士資格

太田さんは地方銀行に入行後，支店，本部勤務を経て，2012年より系列のシンクタンクで産業調査や経済研究，自治体や企業の各種計画策定支援業務に従事している。華々しい経歴に見えるが，失敗の連続だったと笑う。

「恥ずかしい話なのですが，もともとコミュニケーションに苦手意識があり，支店に配属されたとき，受け答えがうまくいかず，いつも問題を起こしていました」

「自分には強みがない」と悩んでいた時期に，研究所の先輩から「ためになるから勉強してみたら」と勧められたのが診断士資格だった。勉強を始めて，組織の中で自分に求められることがようやくわかり始めたという。

「私は相当な問題児だったのだと気づきました。今振り返っても，よくそんな状態で置いてもらえたなと。『何もわかっていなかったことがわかった』ということです」

２．SDGsで仲間と出会う

⑴　足踏み状態の１年目

太田さんは，2017年に診断士試験に合格してから本格的に活動するまではブランクがあったという。

「実は，資格を取ったから１人でできると思ってしまって，入会金を惜しんで初年度は診断協会に入会していなかったのです。組織からの期待要件は診断士試験の勉強でつかんだのですが，コミュニケーションがダメなまま１年が過ぎてしまいました」

⑵　SDGs は魔法の言葉

そんな中，SDGs にのめり込むきっかけとなる出来事が起こる。勤務先で自治体向けのコンサルタント業務を行った際，自治体担当者から「これから SDGs は自治体の仕事と全部ひもづけられる」と聞かされ，「そんなに大事なことなのか」と思い勉強を始めた。SDGs に関するあらゆるコミュニティやワークショップに参加したところ，思いがけない出会いがあったという。

「主催者も参加者もみんな良い人ばかりなのです。私のような変わった人間が入っていっても，何も文句を言わず優しく聞いてくれる。『失敗しても良い，人はみんな欠陥もある』というような雰囲気。『こんなにも虚心坦懐にさまざまな話ができて目標共有ができる SDGs はすごい』と素直に思いました」

多様な人たちとオープンマインドで話すと，物事が前に進む。太田さんのコミュニケーション能力を向上させた大きなきっかけであり，SDGs が「ジブンゴト化」された瞬間だった。

「社会的に何か意義があることに向かって活動すると，楽しく過ごせるし自信もつく。今風にいうと『ウェルビーイング』なのかもしれません」

SDGs にはさまざまなゴールがあるため，仕事も含めて，SDGs にひもづけられるようになれば，自分がやっていることが社会的に意義のあることだと感じられるし，新しいイノベーションが起きる可能性もある。

「ビジネスの共通言語かつビジネスを超えた社会貢献にもなります。行政や非営利団体，市民の方も含めて，みんなが目標を共有できるとすれば，本当にこれほどわかりやすくて，良いものはない。ステークホルダーが連携する手段，まさに共通言語という意味で SDGs は『魔法の言葉』だと思います」

魔法の言葉に魅了された太田さんは，コミュニティへ積極的に参加し続けた。そこで出会った大阪府中小企業診断協会会員の誘いで「中小企業人づくり研究会」を見学。そこでも出会いに恵まれ，刺激を受けた太田さんは，2019年に大阪府協会へ入会し，研究会立ち上げのきっかけとなる新人向けコミュニティ「ゆるつなカレッジ」（以下，ゆるカレ）にも参加することとなる。

⑶　勇者に仲間たちが集う

暇さえあれば SDGs や診断士関連のさまざまなコミュニティに顔を出し続けているうちに，太田さんには１つの考えが湧いていた。「中小企業診断士×SDGs で何かコミュニティを立ち上げられないか」。それを後押ししてくれたのが，ゆるカレだった。

「オフラインで開催されていた第４講までのワークショップや飲み会を通じて，ぼちぼちと『こんなことをやってみたいのだけど』と周りのメンバーに声をかけていました。その中で数名の方に『太田さん，それはやったら良い。ついていきます』と言われて。てっきりその場で調子を合わせているだけだと思っていたのですが」

第５講はコロナ禍でオンラインでの開催となった。そのときに，某国民的ロールプレイングゲームになぞらえ，「勇者」をこの指とまれ方式で募るイベントが行われた。その場で，太田さんは自分のやりたいことを発表した。

「私が手を挙げたら，本当にその人たちがついてきてくれたのです。とてもありがたい経験でした」

３．研究会の立ち上げと実践

⑴　みんなで作ったビジョンとミッション

2020年５月にまず SDGs の勉強会を結成し，４ヵ月間ワークショップを重ね，ビジョンやミッションなど理念的な部分を詰めていった。

「せっかく作って１年で解散するのも嫌ですから。みんなで共有できるビジョンは何か，かなり議論しました。そして，『関西からサステナブル経営の成功企業を100社出す』という壮大なビジョンができました」

発足当初から15名もの立ち上げメンバーが

いたため，ミッションも重要と考え，「学びを深める」，「実践する」，「発信する」，「つながる」という４つの活動方針を決めた。

時間をかけてメンバーみんなの考えをじっくりと聞きながら調整し，ルールなどを少しずつ決めていく。一見遠回りに見えるその過程が，９月の研究会立ち上げ時からの一貫した動きにつながっているのだろう。

「今までコミュニケーションで失敗続きだったから，慎重に慎重を重ねて，ダメな自分を見せないように頑張りました」

４つの活動方針（出所：サステナブル経営／SDGs 研究会 Web サイト　https://sustainablemanage.org/）

⑵　SDGs 支援の実践に挑戦

野心的なビジョンを掲げていたことで，思わぬ実践の機会が訪れた。協会の先輩診断士から，「ぜひうちの会社（アークハリマ株式会社）で，SDGs の導入支援をやってもらえないか」と声をかけてもらえたのだ。

まだまだ駆け出しで，定まったコンテンツがあるわけではないことや実験的企画であることを了解してもらい，2021年夏から半年間の社員に対する研修が始まった。

運営メンバーをはじめ，総勢12名が入れ替わりで全体研修と個別検討会を繰り返しながら，ビジョンとドメインの策定まで支援した。

「土曜日の半日×６回と平日１時間×４回，従業員の方を交えながら進めました。平日は業務の関係上，管理職中心としましたが，土曜日は全員参加。本当に気合が入っていました。半年間の研修を経て，最終的に SDGs のジブンゴト化，自分たちの仕事の意義を感じていただけたと思っています」

実践的な取組みができたおかげで，今は SDGs 宣言策定までの期間をイメージしながらスムーズに支援できるようになったという。

「勤務先での仕事においても『ここはもっと厚く説明しよう』『ここはもっとコンパクトで良いだろう』など，加減ができるようになりました。これは複業で感じた効果の１つでもあります」

⑶　相手の期待を把握する

従業員を巻き込みながらの SDGs 支援は，簡単ではないはずである。企業支援においての気づきや心がけを聞いたところ，「期待要件にどうやって応えるかが大事」だという。

「やはり我々の自己満足的な考え方で進めてしまったところもあると思うのです。初めてやることですし，相手の出方も加減もわかりませんが，自己満足で終わってしまったら意味がなくて，相手の期待要件を上回りたい。本当に『コンサルティングの基本のキ』ですが，そうするには経験値が必要だと改めて思いました」

最初に相手の期待をしっかり把握する。これは勤務先の仕事においても重視するようになった心がけである。

⑷　中小企業にとっての SDGs 推進の意義とは

太田さんが考える，中小企業にとっての SDGs 推進の意義は２つある。１つは自分たちの実現したい理念やビジョン，事業そのものを，わかりやすく社会課題の解決に結びつける翻訳ツールとしての使い方。もう１つは，従業員の方々に仕事に対しての誇りを持って

もらうことである。

たとえば，経営者や営業担当者は自社製品がどのように役立っているか理解しやすいが，製造現場の社員は目の前の部品を作ることに必死でそれどころではない。営業も製造も品質管理も，SDGs を通して自分たちの仕事が果たしている役割を知ることで，たとえ小さな下請けであっても，それが社会の欠かせないインフラを担っているなどの意義に気づけるのだ。

「SDGs を学ぶことで，自分の仕事が社会のどこかに役立っているという誇りを持つことができ，生き生きと仕事ができれば本当に素晴らしいことです」

もちろん，現状に満足するだけではなく，自社が従業員や下請け，孫請けに対して不当な労働搾取を行っていないか，環境に悪影響を与えていないかを確認する観点でも SDGs は生かせるという。

「中小企業も，SDGs を盾に取って元請けと交渉するしたたかさが必要だと思います」

４．新たなパラレルキャリアの形

⑴　自らのサステナビリティを高める

太田さんは収入を得る副業活動はしておらず，自己効力感，社会貢献を主目的としてパラレルキャリアを歩んでいるというが，これは「自身のサステナビリティを高めることにほかならない」と語る。

「先の見通せない世の中になっていますし，さまざまなリスクもあって，今歩んでいる道を諦めざるを得ないことがあるかもしれません。そのときに，それ以外のコミュニティや考え方など，それこそ縁（よすが）がなかったら本当に困ります。非営利活動でも何でも良いと思うのですが，組織に身を置いている自分とは別の形で活動することによって，それが結局，自身のサステナビリティを高め，活躍の場を広げることにつながる。何かあったときでも『何とかなる』というマインドが身につきますし，組織に対してもフラットなものの見方ができます」

何かに執着しやすいと自らを分析する太田さんにとって，さまざまなコミュニティに身を置くことで拠って立つ縁を増やせたのは，精神衛生上も良かったと語る。

⑵　やりたいことで縁を広げる

複業を行うにあたって，何から手をつければ良いのかを聞いてみた。

「本業の収入があるという強みに感謝し，それを生かして，まずは自由な時間に生産性を気にしすぎずに自分のやりたいことを温めて突き詰めるのが良いと思います。自分の強みが磨かれることで，それが必要とされる時機がきっと来ます。私にとってはそれがたまたまSDGsだったのです。SDGsを通してお手伝いさせていただくと，巡り巡って自分が困ったときに助けてくれるケースも本当に多くて，やって良かったと思う瞬間です。本当に『情けは人のためならず』です」

現在は，研究会活動などで得た知見をベースに，SDGs を切り口とした新たな支援メニューを勤務先においても試行しているという。

やりたいことを突き詰めて，縁を広げることで自らのサステナビリティを高める。生き生きと語る太田さんを通して，新たなパラレルキャリアの形と魅力を感じることができた。

太田　宜志
（おおた　たかし）
地方銀行入行後，支店・本部勤務を経て系列シンクタンクにて調査研究業務に従事。2018年中小企業診断士登録。2020年「サステナブル経営/SDGs 研究会」（大阪府中小企業診断協会登録）を設立。中小企業向けにSDGs をわかりやすく解説するとともに，企業の実践を支援している。

福田　浩之
（ふくだ　ひろゆき）
1974年生まれ。関西大学工学部卒業。専門商社で営業に従事。地元・大阪に貢献する活動を模索中。2021年中小企業診断士登録。